

グローバル化と剣道の理合い

第80回

青山社中株式会社筆頭代表・CEO

朝比奈一郎

ハーバードでの衝撃
体験

「最も大事なことは、気合だ！」
“The most important thing is KIAI!”

今から15年も前になるが、2001年秋、経済産業省での4年の勤務を経てハーバード大学行政大学院に留学した際、大学本体（学部生）の剣道部の稽古に参加したことがある。米国では9月から新学期が始まる。従ってその時期は、新入生たちが剣道部に入部した直後だった。確かファースト・ネームがデイビッドという名前のキャプテンが、新入生たちに説いていたのが、冒頭のセリフである。

デイビッド君は、日本語の「気剣体の一致」の解説をし、その中で特に、技量以上に気合が大事であることを強調しようとして、途中、冒頭のセリフを何度となく繰り返していた。多くの新人たちは、**“KIAI”**の意味が今一つ分からずに

キョトンとしつつも、「まあ、声を大きく出せということだろう」くらいの理解で、素振りの際などに大声を上げていた。

私は、アルファベットではなく、カタカナで書かれた上級生たちの垂（たれ）を見つめながら、また、新人たちが、「KIAT」を入れて、「いち、に、さん、」（ワン、ツー、スリー、ではない）と声を張り上げて素振りをする姿を見つめながら、何とも言えない感動に包まれていた。特に外国人から見ると、極めて特異な外見、表現や理論を持つ剣道という極東の文化が、一定の普遍性を持って、受容されていることに驚愕（きょうわく）したのである。

剣道との真の出会い

私が剣道を始めたのは小学2年生の時だ。近くの警察官の方々がボランティアで運営してくださっていた会に所属し、全寮制の中高に入学するまで続けた。そして、中高時代は武道が必修で、迷わず

剣道を選択し、週に1度程度は剣道に触れ続けていた。

ただ、その頃の私は剣道を単にスポーツの一つとして考えていた。テニスなどと同じく剣道も試合が大切で、勝つために練習をする、というくらいの認識であった。相手に打たれずに、いかに上手くポイント（面、籠手、胴）を奪うか、ほぼ、それだけを意識していた。

そんなある日、「面を打つふりをして籠手を打つ」など、フェイント系の技に自信のあった私は学校の武道大会で優勝をし、内心、得意満面に、地元の埼玉県

飯能市にある剣修館道場の門を叩いた。

今思えば厚顔無恥の限りだが、すぐに館長の藤牧先生に立ち合っていたが、自分のフェイント系の技が全く意味をなさないことを知ることとなった。

グローバル化の中で影響力の大きい欧米的合理主義から見ると真逆だが、先生は、当時の私に対し、「ガチャガチャとあまり攻めるな」、「よけるな」と説いた。

正直、理解力が不足していた当時の私は、「手足を縛って泳げ」と言われているように感じた。攻めずに、よけるに、どうやって相手に立ち向かえば良いの



●プロフィール

朝比奈一郎（あさひな・いちろう）

1973年4月東京都生まれ。東京大学法学部卒業。ハーバード大学行政大学院修了（修士）。1997年、2010年経済産業省。プロジェクトK（新しい霞ヶ関を創る若手の会）代表として霞が関改革を提言。経産省退職後、2010年に青山社中を設立し、筆頭代表・CEOに就任し、若手リーダーの育成や国・地域の政策作りに従事。また、中央大学大学院（公共政策研究科）客員教授や三条、那須塩原、川崎、沼田の経済活性化アドバイザーを務める。著書は「やり過ぎる力」など多数。

か。訝^{いぶか}しげな態度を取っていた私に、先生は、「弱い犬はキャンキャン吠えるが、強い犬は肝心な時にしか吠えない」というイメージを持たせると共に、剣道の「理合^いい」について語り始めた。

合理を逆に書いて「理合^いい」だが、つまり、剣道なりの理屈があるということだ。自分の剣が相手と自分との間の中心線を制していれば、そして、相手が打つて来ても動じることなく制し続けられ、理屈上は、相手が自分の面を叩くより早く自分の剣尖^{けんせん}が相手ののど元に突き刺さる。剣を動かしてよける必要はない。そして、中心線の制し合いをしている最中に不用意に打ちに行っても、返り討ちに合う危険が高い。そう考えると、むしろ、やたらに攻め、よけることは、実は合理的ではない。

そして、これは人生に通じる話だとも先生は説く。「剣道理念」を胸に抱いて亡くなられた故小川忠太郎^{おがわちゅうたろう}先生をはじめ、真に剣道を学ぶものは、単なる

スポーツとしてではなく、「人間形成の道」として、こうした「理合^いい」を理解して人間陶冶^{とちや}に努めていると。こうして私は、剣道を始めて約10年後に、真に剣道に出会った気になった。同時に、この素晴らしい考え方は、日本はもちろん、世界で理解されるべきではないかと感じた。

特異性と普遍性を併せ持つこと

剣道は独自の「理合^いい」を基盤に成立しているが、一見、不合理に満ちている。スポーツ界では常識の「試合後のガッツポーズ」はご法度だし（剣道では、勝者は敗者に惻隱^{そくいん}の情^{じょう}を見せるべきで、欲望に任せて自分の感情を見せるべきではない）、先述の通り、個々の「理合^いい」がグローバル基準と異なることも多い。全日本剣道連盟は、「理合^いい」が消滅しないよう、今でも、オリンピック競技にな

ることに反対していると聞く。非常に特異である。

しかし、真にグローバルであるとは、単に「世界の皆と同じ」ということではない。私は、グローバル化で最も大切な要素は信頼の獲得だと思っている。その第一歩は、単に相手に媚^こびて合わせるのではなく、「自分は何者で、何を考えているか」を明確にすることだ。世界は、微笑を浮かべて追従する人より、自らのスタンスを明確にする人を信頼する。必ずしも相手の合意を得る必要はない。英語に“agree to disagree”という、日本語に訳しにくい表現があるが、これは「一致していないことで合意している」という一種の知恵である。多民族にあふれた世界では、考えが違ふことはよくある。信頼獲得の第一歩は、立場の明確化に他ならない。

留学時代に話を戻そう。大学院に、警察庁出身の、私と同じ剣道三段の仲間がいた。二人で相談し「各国クラスメイト

の前で剣道の実演をし、その考え方につ

いて語ろう」ということになった。当日、

切り返しや地稽古をした後、「理合い」

について説明した。中心線の話や、肝心

な時にしか攻めない話などは新鮮だった

ようで、「授業中、どうして日本人は、

饒舌な他国人と違い、肝心な時にしか発

言しないのかが分かった」などの感想が

寄せられた（肝心な時にも発言しない日

本人には困り者だが）。

そんななか、南米の学生から「何故、

鏑迫り合い状態より、一足一刀の方が怖

いのか」という質問があった。近い方が

怖いし攻めている、と考えるのが確かに

合理的であろう。先生の受け売りで、私

が「男女間の恋愛を見る。間合いが近す

ぎると親友や兄妹になってしまう。遠す

ぎるのは論外。一足一刀が一番緊張感が

ある」と説明したところ、拍手喝采・大

爆笑で、満場の理解を得た。特異性を持

ちながら普遍性を持つ。これこそ武道の

持つ可能性であり、グローバル化の中で

必要なことだ。

日本の「理合い」を 世界に広めたい

5年前、約14年勤務した経済産業省を

離れ、日本を活性化する会社「青山社中」

を立ち上げた。「世界に誇れ、世界で戦

える日本」を創るべく、リーダー人材育

成、各種政策作り、地域活性化などに取

り組んでいる。

「官僚を辞めて役所を飛び出し、意味不

明な会社を創る」行為は、「動き回り過

ぎだ」と先生のお叱りを受けるかもしれ

ない。ただ、自分としては、中心線を制

し、目標を見定めて渾身の力で飛び込ん

だ動きだと信じている。

昨年、主宰するリーダー塾の教え子た

ちと「日本と世界をつなぐ会」という一

般社団法人も設立し、地域の産品の海外

展開支援や中国の若手とのリーダー会議

の支援などを行っている。その中で、日本

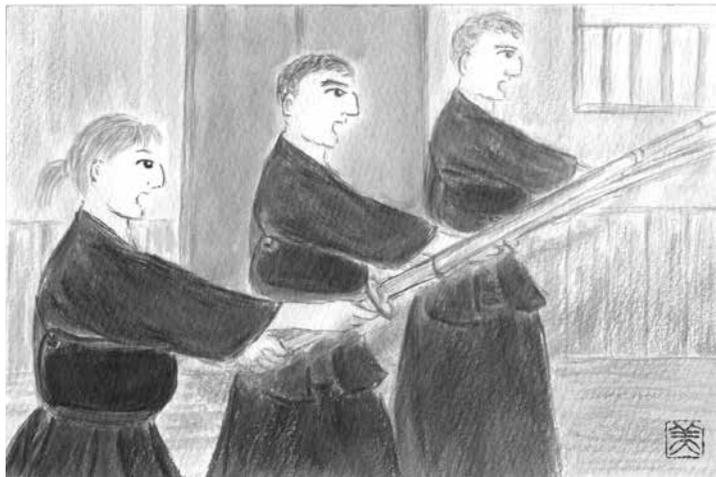
の「理合い」を世界に広めたいと考えて
いる。「KIAT」を訴えるデイビッド君が
一人でも増えるように。

グローバル対応も含め、色々な観点で

日本を少しでも良くして、いつの日か、

先生に「正しく攻めて、一本取りました」

と報告したいものである。



さし絵 園田美穂子